

『ゴドーを待ちながら』の速度

アイルランドの劇団「マウス・オン・ファイア」が上演する『ゴドーを待ちながら』の上演を見て、いちばん印象に残ったのはその速度だった。

今回の上演は、1幕と2幕とを合わせておよそ115分。英語での上演であり、ベケット自身の上演においてもいくつものカットやセリフの変更が加えられているというから単純な比較こそできないものの、白水社から出版されている安藤信也・高橋康也訳の『ゴドーを待ちながら』はページ数169ページ。つまり、それは俳優たちはとても速いテンポでセリフを語ることを意味する。

例えば、何度もリフレインされる

エストラゴン もう行こう。
ウラジーミル だめだよ。
エストラゴン なぜさ？
ウラジーミル ゴドーを待つんだ。
エストラゴン ああそうか。

という聞かせどころのセリフも、淀みなくポンポンと発話されていく。そのセリフのやりとりには、叙情性やある種のウェットさが入り込む余地はなく、「軽快」であり「健康的」とすらいえる印象を抱く。そういえば、若き日のベケットもまたクリケット、ラグビー、テニスなどに打ち込んだ「健康的」な人間だった。

「ベケット自身の演出プランで上演」と謳われている今回の『ゴドーを待ちながら』。舞台上には、ト書きに指定された「一本の木」だけでなく、腰掛けられる大きさの岩が置かれているが、これはベケットが73年、当時西ベルリンのシラー劇場で行った演出を踏襲したもの。木の形がベケットのそれとは異なったり、カーテンコールが行われるといった点はベケット演出とは異なるが、ベケットが使用した英語テキストを用い、上手奥に木が、下手前に岩が置かれた配置など、概ねベケット演出を踏まえている。ベケット研究者のルビー・コーンによれば、シラー劇場でのドイツ語上演は、1幕が70分、2幕が55分だったというから、それに比較すると今回の上演のテンポはやや早まっているのかもしれないが、元のテンポにしても相当に早い。今回の上演の翻訳を務めた堀真理子による『改訂を重ねる『ゴドーを待ちながら』 演出家としてのベケット』（藤原書店）によれば、「ベケットの演出では、声の出し方からせりふの言い方、その速さに加え、動きや身振り、間の取り方まで厳しい要求をした」という。

なぜ、演出家ベケットは、『ゴドーを待ちながら』に、この速度を求めたのだろうか？

ポンポンと軽快に進んでいく登場人物たちのやり取りは、度々、ト書きに「沈黙」と書かれる突如とした停止によって切断される。軽快なテンポのやりとりの会話が突如として止まった時、あたかも慣性の法則のように、ウラジーミルやエストラゴンといった登場人物だけでなく観客もまた、その沈黙の中に投げ出される。まるで、物質のようにクリアではっきりとした沈黙にいたたまれなくなった次の瞬間、彼らはまた何事もなかったかのように動き出す。おしゃべりに興じている限り、登場人物だけでなく観客たちもまたその沈

黙から目をそらすことができる。劇場に集うすべての人間は、軽快なやり取りを通じて「健やか」にその沈黙をやり過ごしているのだ。

かつて、『ゴドーを待ちながら』とは何を表現しているのか？ と問われたベケットは、「共生だよ」と答えたことがある（『サミュエル・ベケット証言録』白水社）。私たちは、劇場において、あるいは日常においてもまた、「沈黙」の上に共生している。ベケットの求めたテンポとは、私たちをその沈黙に放り出すための助走のようなものだろう。そうして、描かれる「沈黙」には、恐ろしいほどの深さとくっきりとした輪郭が与えられている。

※引用したセリフは安藤信也・高橋康也訳であり、今回の上演で字幕として投影されるものとは異なっている。

萩原雄太（かもめマシーン）

1983年生まれ、茨城県出身。演出家・劇作家・フリーライター。早稲田大学在学中より演劇活動を開始。愛知県文化振興事業団が主催する『第13回AAF戯曲賞』、「利賀演劇人コンクール2016」優秀演出家賞、浅草キッド『本業』読書感想文コンクール優秀賞。